

私の看護師としての生き方

第3弾

私が看護師になって40数年になる。
これまでの私の看護師としての生き方について、少しでも誰かに伝えることができないかと思ひ、数回に渡り お伝えしていきたい…。

私が訪問看護を辞められない理由

訪問看護を志してからのことを振り返ると色々な思い出がある。

- ◆ 阪神タイガースファンの一家。肝臓癌末期の父親を在宅で看取ることになった。阪神タイガースが勝っていると なぜか体調がいい。巨人ファンの私もいつの間にか阪神タイガースを応援していた。



- ◆ 「桜の花を見に行こうね」と、歩行訓練を楽しみにしていた Tさんは、寝返りをうただけで圧迫骨折で寝たきり状態になってしまった。落ち込む Tさんに娘は「おじいちゃん 看護師さんが必ず花見に連れて行ってくれるってよ」と励ます。介護タクシーを手配し ストレッチャーにて約束通り桜を見に行った。満開の桜よりTさんの満面の笑みが素敵で今でも忘れられない。

- ◆ 老衰状態の Hさんは お風呂が大好き。「死ぬ前に 風呂に入りたい」と。血圧が低く不安定な状態だが 家族も「最後にお風呂に入れてあげたい」と言う。家族と一緒にひやひやしなから入浴させると「もっとゆっくり入りたかったよ」の一言。「無理言わないで…」と心の中でそっとつぶやく。



- ◆ 息子の結婚式に出席するために退院した Nさん。結婚式が近づくにつれて死も近づいていた。結婚式には出席できず、自宅で意識が遠のく中、結婚式が無事に終わるよう訪問看護師の私と待ちわびる。結婚式が無事に終わり、その様子をビデオで観て ホツとしたように息を引きたった。花嫁になって最初の仕事は 家族みんなでNさんのエンゼルケアだった。「これ以上の悲しみはない。きっと2人は幸せになれるよ…」と声をかける。



家族と流した涙は 止まることを知らなかった。

訪問看護をして、たくさんの患者さんとそれを見守る家族と出会った。

ともに苦しみ、ともに悲しみ、そして家族と一緒に看取ることができた時はホツとする。

そして看護師という職業を超えた人と人の繋がり、絆を築くことができた時、私はこの仕事に誇りに思い、また頑張ろうと勇気が出る。

私が訪問看護を始め、迷ったとき あるクリニックの赤ひげ先生から教えてもらったこと…

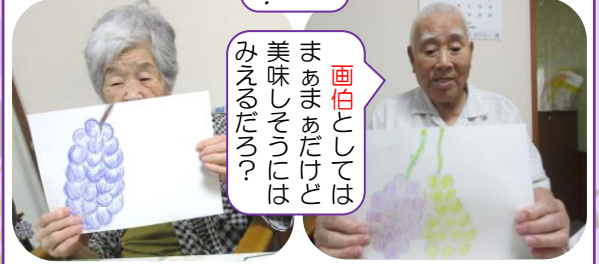
～医は仁術なり～

自分がケアする中で 迷ったり、判断に困った時『自分の親だったら…・子どもだったら…・身内だったら…』どうすればよいか。赤ひげ先生は「意を志した時のことを考えたら必然的に答えはでるんだよ」と。

今もこの想いは忘れず訪問看護を続けている。

金沢 二美枝

ぶどう狩り



「運営推進会議 及び 家族会」開催

在宅療養生活において、高齢になると嚥下機能が低下したり、偏った食事で栄養不足になりがちである。食事内容や形態は重要な役割を果たしている。また、食事を作って準備する家族の介護負担も大きい。

そこで、配食サービスや市販の食事を利用することで介護負担の軽減につながるのではないかと、参加者の皆さんにも介護食を試食してもらった。実際に食べてみて、味も様々で色々な介護食があった。介護する人もたまに息抜きで介護食や市販の食事等を利用するなどして、介護にゆとりが持てれば、そのゆとりが優しさになるのではないだろうか。

運営推進会議は、事業運営の透明性及び地域との連携・交流の確保、サービスの質の向上、認知症・高齢者ケアの理解促進・地域づくり等に努めるため、概ね年6回(2ヶ月に1回)開催しています。

